

卷頭言

共生の時代 七田基弘（国際経営研究所・所長）

最近、共生ということばが流行っている。共生はシンビオウシス (symbiosis) ということばの訳語であるそうだ。「シンビオウシス」ということばは、生物学上のことばで、二つの異なった種、生物などが相互に密接に密着して生活し、種々の方法で相互に依存していることを示しているという。植物と花粉の媒介をする蜜蜂やヤドカリとイソギンチャクの関係などがそれを表す例に挙げられている。ライオンとシマウマの関係は一方的にライオンがシマウマを食べてしまう関係だからか、共生とはいわないようである。わたくしなどの世代では学校で共棲ということばも習った。共生と共棲はほとんど変わらない意味で使われているようである。文字面からみると、どちらのことばも生きている（あるいは棲んでいる。）場所が共通であることしか示していないように思われるので、その中には食物連鎖の関係も入るような気がする。シンビオウシスということばが相互に利益を享受して暮らすことに意味があるというのなら、相利共生というように「共生」を限定することが必要になるのかもしれない。

閑話休題。この「共生」ということばが最近では経済生活の分野で使われるようになってきている。その意味するところは多様のものであるが、その中心的な考え方は市民の主導による政治、行政、経済の活性化に尽きるように思われる。民主主義の原則にしたがって、市民が主導権を握れば、現在の社会が当面している問題は市民の良識によって解決できるという考え方が基本にあるのであろう。ここで一つ問題がある。それは「市民」とは何であるかということである。市民ということばも近頃ジャーナリズムを中心にして好んで使われるようになった。米国の影響であろう。本来、市民のなかには、エゴの固まりもいるし、権力指向の人もある、もちろん良識をもつ人は多数いる。「市民」の意見も多種多様で、市民の間に利害対立や政治的対立があることが普通である。そして民主政治の根幹はこの

ような多様な利害関係や対立を調整していくことであると思う。しかし、「市民」の意見を集約することはきわめて難しい。どちらかという声の大きい方が通りやすいし、しかも、ジャーナリズムでは、声の大きい者の意見や人の意表をつくような新奇な主張やそのジャーナリズムの主張と同方向のものを「市民」の意見として報道する傾向があるように思われる。しかし、ジャーナリズムの意見と同じではない意見は多数あるはずであり、それが無視されることになる問題である。

日本では、古来自然との間に共生の関係が存在していた。自然に対する畏敬の念、自然のなかに神の存在を考慮すること、自然との調和が狭い国土のなかで暮らしてきた日本人の知恵であった。鎮守の森も、山岳信仰も、人間の果てしない欲望を抑える一つの手段であった。儉約の奨励もそうであった。第二次世界大戦で破れた後、この国は、連合国総指令部の実質的支配の下に、米国の価値観を理想とするようになった。もちろん、これに対しては対抗がなかったわけではないし、米国の価値観に日本人が今まで知らなかったような新しい側面があったことも確かである。伝統的な価値観を切り捨てるには「封建的」ということばでじゅうぶんであった。日本の伝統的な考え方は時代時代の影響を受けており、そのなかに封建時代の考え方が根強く残っていたことは確かである。そして、そのなかに合理的なものも含まれていたはずである。しかし、これはすべて否定された。

「自然の征服」もアメリカ流の価値観である。「自然の征服」がヨーロッパから移民した白人の国、米国を世界の超一流国に発展させたことも確かである。そして、日本も、米国流の自由主義経済の利益をじゅうぶんに味わわせてもらったことも確かである。消費生活は急速に上昇し、経済大国と称するようになった。東京で世界のブランド品で買えないものはない。しかし、一方、自然の征服は、地球のエコシステムを破壊する大きな原因になった。西暦20世紀の後半になると、人類は初めて人権と基本的自由を共通の価値観とするようになった。この価値観が自然の征服と結びつき、その程度が野放図になったとき、人類は、その欲望を最大限に実現する格好の思想と口実を手に入れた。地球および地球上の種にとっては最大の悲劇が始まった。人類が暴走を始めたのである。

このように考えると、共生はもはや単なる「市民」だけの問題ではない。人類と地球との共生、地球上の他の種との共生が共生の中心的な課題でなければならぬ。自然征服の思想の克服と新しく人類が獲得した価値観の再吟味、20世紀の中頃から顕著になった人類の異常発生と地球自然との調和が人間が未来にわたって生きつづけていくために

避けて通れない問題となっているのである。そして、何よりも重要なことは、今や人類の個人々々がこの現状を認識するとともに、個々人が努力し、解決していかねばならない時代であることを自覚することである。

こうして、人類は今や自分たちの「発展」の歴史、人類史その物を見直すことも必要になった。人類は知恵によって万物の霊長の地位を獲得し、今や終わろうとしているこの世紀に、古今未曾有の発展を遂げることになった。宇宙に進出し、「宇宙征服」までをも夢見ることができるようになった。それだけに、われわれ人類は、われわれが住んでいる地球にとってわれわれは何であったのか、他の種にとって人類は何であったのか、をもう一度問い直す必要があるのである。他の種にとって圧政者であり、搾取者であり、殺戮者であり、地球にとって寄生虫のような存在に墮してしまった人類が開発や闘争によって他の種と地球にもたらした負の部分を見詰めたが、地球および他の種との本当の意味での共生を考えていくことが、人類の英知に求められることとなったのである。

それは経済だけではなく、広く人類全体の社会と文化の変革をもたらすこととなる。人類にとって多くの苦痛と膨大な資金を必要とすることになるのであろうし、どこが、そのイニシアティブをとるかということも問題となる。現状では、理想的に改革された国連および専門機関が協力して行うことになるであろうが、何れにしても、完全なレセ・フェールの思想では実現することはできないし、その思想では状況はさらに悪化することになるであろう。自由経済の利点を生かしつつ、ヒューマニズム思想に立脚し、その上で地球社会全体の維持発展を指向する新しい経済、社会の発展の思想、哲学が必要となる。そして、その思想と哲学に裏付けられ、人類社会全体に活力を与えながら、地球および地球上の種の全体の共生を考えた「人類計画」ともいふべきものが必要となるであろう。それが新しい「共生の時代」の始まりとなると思う。

(しちた もとひろ／経営学部教授)